

# 東洋医学研究会

並木 隆雄

## 初めに

一般的な大学での文化系同好会は、趣味的な同好会の集まりであることが多いと思われる。しかし、当研究会はその様な趣味を超えた動機での創会の経緯があり、成り立ちから少し異質な研究会である。たぶん、千葉大学の同窓生の方々は、驚く方も多いかも知れないが、実は日本において東洋医学というものが大学アカデミズムと出会った最初の歴史が、千葉大学の東洋医学研究会の歴史と重なるのである。つまり、日本で最初に大学において正式な手続きを経て創会された東洋医学関連の同好会である。そういう意味から千葉大学医学部135周年記念誌に東洋医学研究会のことを書かせていただけるのは、大変名誉なことであり、長い歴史があつてのことであると理解している。

## 歴史（当研究会出身者は一部敬称略）

わが研究会の歴史は、戦前の昭和14年（1939年）にさかのぼる。平成21年に創会70周年を迎えた。千葉大学東洋医学研究会30年史・50年史・60年史が発刊されており、その中に詳しく載っているので、詳細はそれらの発刊物に任せるが、抜粋をお書きする。それらの内容の大まかな流れは、末尾の表にのせたので参考いただきたい。

昭和14年5月に学生で同級だった藤平健（昭和15年卒）と長浜善夫（昭和15年卒）が東洋医学に関心を持ち、意気投合して発足に奔走。会長（顧問教官）は眼科教室の伊東彌恵治教授になっていたとき、千葉医科大学内に東洋医学研究会（われわれは約して東医研と言っている）が発足した。学生のサークル活動とはいえ、まだ医学会では東洋医学に理解の少なかつた時代であったため、顧問教官がすんなり決まらず巡り巡って、伊東教授にお願いしたという（写真1中央：伊東教授）。しかし、そ

れが幸いして、東洋医学全体（漢方医学以外のインド医学など）に関心がおありの伊東先生にお願いできたとのことである。その後、戦争の時代という暗い時代に入ったため、研究会自体も自然休止状態となつた。しかしその様な中、伊東先生は古医書をどんどん買いこみ蔵書を増やされたという（のちに眼科教室に東洋医学研究室という部屋を作られ保存された）。～現在それらの蔵書は千葉大附属図書館亥鼻分館にその他の資料と一緒に保存されている。

終戦後は、昭和21年3月頃から東洋医学の講義を再開された。その講義は、現在にも続く千葉大学東洋医学研究会『自由講座』（昭和22年～現在）に連なっている。『自由講座』は名前の通り、学生が選択で自由に聴講できる講座ということで、教授会の承認の元、学内で課外授業の形態をとつて行われた。講師陣は主に藤平先生と小倉重成先生（昭和17年卒）を中心に、和田正系先生（大正11年卒）、伊藤清夫先生（昭和13年卒）も加わっていたと記録されている（写真2）。また、『自由講座』が始まる前に、眼科の東洋医学研究室で漢方外来を「臨床講義」という名で同時に始めた（写真3）。実際の外来があったおかげで実際の漢方診療に触れることができた学生も多かったと思われる。その頃の大きな出来事に、昭和24年に「東洋医学研究所設立趣意書」の文部省への提出がある。この趣意書は千葉



写真1.顧問の眼科伊東教授を囲んで(昭和24年当時の東医研関係者)

## 第5章 交友の広がり

大学医学部の教授会で承認を得て伊東弥恵治教授が提案したものであった。残念ながら結果にはこの提案は採択されなかった。しかし、現在も研究会同窓会などの大きな集まりでは、鍋谷欣市（昭和27年卒）がよくこの趣意書の説明をされている。まさに伊東教授の東洋医学に対する熱気は語り継ながっていると個人的に考えている。

昭和44年ころから、『自由講座』が一般医療関係者・一般人も卒後教育・市民講座という趣旨も含ん

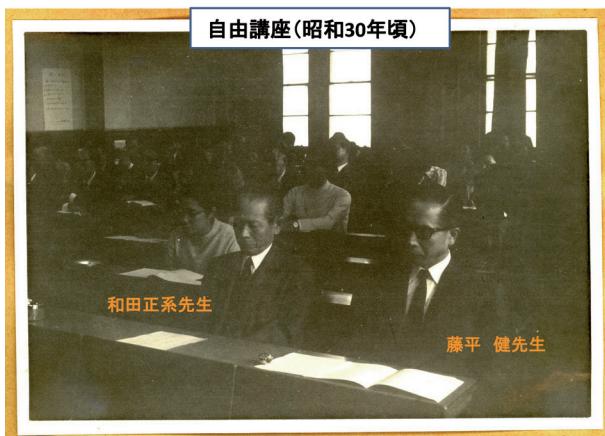


写真2

漢方外来



写真3

自由講座公開講座（昭和44年）



写真4

で聴講できる公開講座形式となり（写真4），現在も千葉大学附属病院3階の第2講堂で木曜日に開催が続いている。一方，30年以上続いた漢方外来は昭和54年9月末で閉じることになった。というのは昭和54年4月に附属病院が現在の建物に移動するのに際して，受付方法やカルテの保管システムが変更となつたためであった。期しくも同じ年の4月に富山医科大学附属病院和漢診療室が開設され，当研究会出身の寺澤捷年（昭和45年卒），土佐寛順（昭和50年卒）が着任された。その後，続々と，当研究会関係者を中心に富山医科大学和漢診療部に千葉大学から医師が赴任した（今田屋章（昭和46年卒），三瀬忠道（昭和53年卒），伊藤隆（昭和56年卒）ほか）。

こうして，一つの時代が終わり東医研『自由講座』の運営が新たな段階になった。これ以降，千葉大学自体は中堅の先生方が不在となったため，『自由講座』は，藤平・小倉両先生と松下嘉一（昭和36年卒）などの東医研出身の開業・勤務医と若手医師（並木隆雄（昭和60年卒），勝野達郎・佐藤良一（平成2年卒），渡辺哲（平成5年卒）など），や東医研出身以外で手弁当でご協力いただいた先生方（秋葉哲生先生，池田和広先生，石毛忠雄先生，板倉米子先生，鎌田慶市郎先生，小林三剛先生，鈴木重紀先生，田畠隆一郎先生，千葉東弥先生，中村謙介先生，細川喜代治先生，村上えい子先生，盛克己先生，山下泰徳先生：あいうえお順）のご協力で支えられることになった。また，平成15年からは会長の田邊教授のおかげで千葉大学医学部附属病院卒後・生涯医学臨床研修部および薬学部山崎真巳助教授により千葉大学大学院薬学研究院との共催の形になった。平成17年には千葉大学に和漢診療学講座が開設されたのを期に，その後同講座関係者が講師に加わり現在に至るのである（平成22年度は，これまで出てきた先生以外に喜多敏明先生，笠原裕司先生，地野充時先生，池上文雄先生が加わっている）。

この間の東洋医学研究関連の大きなイベントは下記である。

昭和54年に40周年を迎えた。記念式典を翌年開催。  
平成元年に50周年を迎えた。記念式典を開催。  
平成11年に60周年を迎えた。記念式典を開催。  
平成21年に70周年を迎えた。記念式典を開催。

## 歴代会長

70年以上の歴史の中で、顧問をしていただいた先生方をご紹介する。

伊東彌恵治先生

(眼科学教授 昭和14年～昭和26年)

鈴木 宜民先生

(眼科学教授 昭和26年～昭和50年)

熊谷 朗先生

(第二内科教授 昭和50年～昭和57年)

奥井 勝二先生

(第一外科教授 昭和57年～平成3年)

大藤 正雄先生

(第一内科教授 平成3年～平成7年)

(当研究会出身)

今野 昭義先生

(耳鼻咽喉科学教授 平成7年～平成14年)

田邊 政裕先生

(医学教育研究室・総合医療教育研修センター教授 平成14年～現在)

## 所属学生と活動

学生は、初期は医学生を中心であったが、途中から薬学部生、附属病院看護学校生、看護学部生などが加わった。昭和53年ころから、薬学部では鳥居塚和生（薬学部52年卒）により西千葉キャンパスでも独立した活動を始めた（薬学部東洋医学研究会）。その後の薬学生は、薬学部東医研と東医研（亥鼻）の両方に所属する人も多かった。また平成に年号が変わったころから西千葉でもさらに積極的に勧誘を行われ、文学部、教育学部、法経学部、理学部、工学部、園芸学部と多彩な人材も出入りするなど、華やかな時代に入った。学生の人数は多い時は卒業生ベース（卒業年限が所学部ごと違うため）でたとえ

図1. 部員数（卒年1940～70年度）

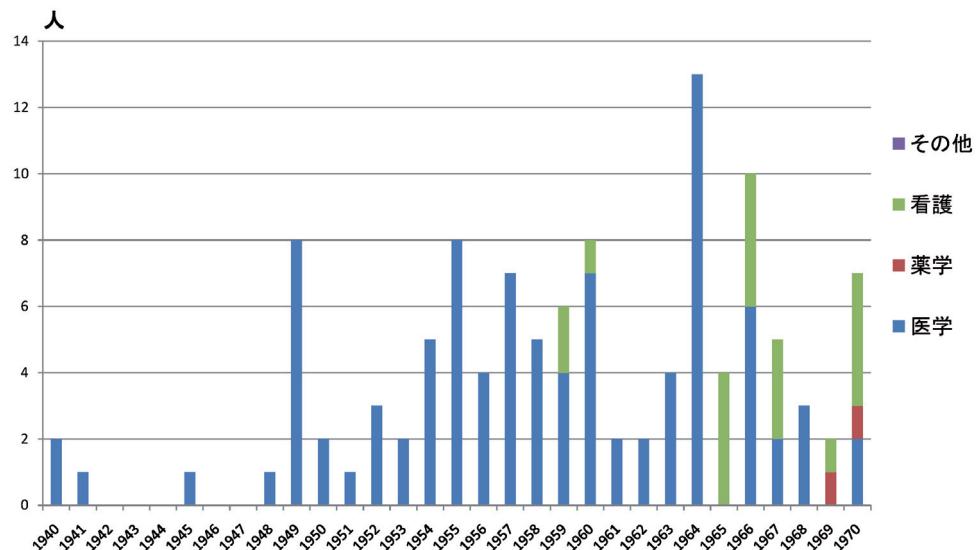
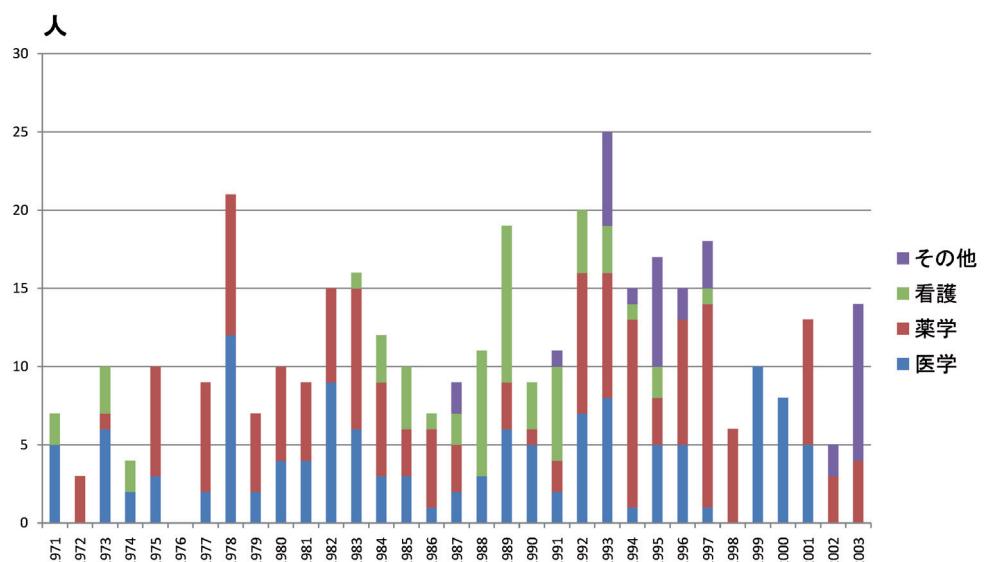


図2. 部員数（卒年1971～2003年度）



## 第5章 交友の広がり

ば、昭和53年度は20名、平成元年度19名、平成5年度25名など多数の部員を抱えた時期もあった。しかし逆に少ない人数が続く年もあった（図1・2）。「人數的には隆盛の時期もあり、また存続を危ぶまれた時期もあった。隆盛を誇った時期は部長がそれをまとめてゆく求心力を發揮するのに骨をおり、また少人数のときには自由講座の存続に必死の思いで努力された（五十年史より）」。図でもわかるように1940（昭和45）年ころまでは、医学部中心だったのが、それ以降多彩になったのがわかる。

## 活動

70年の長い歴史のある研究会であるので、その時代時代で、活動状況もさまざまであったと思われる。現在の部室は、昭和57年ころから、サークル会館（旧精神科病棟）の2階にあり、そこで部会などの活動拠点としている。それ以前は、現在の病院のバス停向かいの駐車場にあった建物内にあった。木造の建物のなかにあり、ベニヤ板で仕切られ、一部雨漏りがするような場所であった。

活動内容は、時代ごとに全く異なりまとめるのは困難である。とはいっても、基本は、学生どうして勉強会（部会）を開き、それに加えて木曜日の『自由講座』で藤平先生を中心とした先輩の講義を受けるという形であろう。たとえば、筆者が所属していたころ（昭和54年4月～60年3月）の活動は、部会が週1回（月曜日）と木曜日の自由講座（16時30分～18時30分）であった。そのほか、部員が多い時は臨時に他の曜日に集まりたとえば、鍼灸の勉強会が開かれた（鍼灸班）。部会では、在校の先輩が作成してくれた初級テキストを用いて東洋医学全般の講義をうけた。さらに少し慣れると1年生が自分たちで担当を決めて教え合ったりもした。1学期も過ぎて夏休みには、数日の合宿を行った。その際、手作りの中級の教科書を分担で作成、予習を兼ねた。とはいえ、東洋医学は自習が難しく、それは簡単には勉強できない。実践が重要である。部室には頻用の漢方エキス剤を分包し保存していた（薬局から廃棄予定の分包機をもらってきて、分包は自分たちで行なっていた）。そうして分包した漢方薬を実費で買って、自分や家族の主に感冒などのときに用いて、腕を磨いた。

さて、秋は、みのはな祭と西千葉での大学祭があり、それに向けての準備と開催（9～11月）。そして、1年の締めくくりは、卒業生の追い出しコンバ。さらに4月の新入生勧誘のための準備（新入生

のための初級テキスト作成や勧誘ビラ作り）で1年はあっという間に過ぎて行った。

このようなめまぐるしい活動の中、サークル活動の魅力の一つは、大学の先輩後輩との出会いや、他学部の人々との交流である。たぶん今も昔もこのことは変わらないと思う。

最後に、最近の活動について現役部員にお願いして書いていただくこととした。

## 現在の活動

（2010年担当：医学部2年 山内陽介）

現在の千葉大学東洋医学研究会の活動は、1)毎週水曜日18:00～19:30に部室にて学生による東洋医学勉強会、2)隔週木曜日18:00～19:30に大学病院3階第2講堂にて千葉大学東洋医学自由講座、3)他大学との交流、4)実際の診療見学、鍼灸師・神経内科非常勤の村上えい子先生による鍼灸実習、といった活動を行っております。

- 1) 東洋医学勉強会は学生が主体の初学者向けの勉強会で、2010年度より開始いたしました。講師役は学生が務め、毎回パワーポイントスライドで16枚程度の勉強資料を作成し、先生方には恥ずかしくて聞けないような基礎の基礎から勉強を始めています。本勉強会資料はホームページ上で公開し、他大学の初学者に対してもアクセスを可能にして、全国の医療系の学生にとっても漢方医学がより身近なものになるよう努力しております。目標としてはプライマリケアの現場で漢方診療ができるようになることを目指していますが、なかなか到達するのが難しい目標ですので、最低でも漢方医学の全体がなんとなく自分なりに理解できるレベルまでは到達したいと考えています。現在は一人の学生が主に講師を担当していますが、会が進めるにつれて他の学生にもデレゲーションを行い、部員全体で調査能力、資料作成能力、発表能力の向上を目指していきたいと考えています。
- 2) 千葉大学東洋医学自由講座は、始まってから2010年で64年目になる非常に歴史のある講座です。日本の東洋医学の第一線で活躍されている先生方がお忙しいところ講義をして下さっています。2010年度の前期は東洋医学の入門講座を講義して頂いており、後期には東洋医学の重要な古典である傷寒論を読み進める形の講義をして頂いております。講座に参加資格は設けておらず、医師、薬剤師、学生および一般の方まで幅広く参加していただけております。毎回40～50名ほど参加いた

だいており、講堂が手狭になるほど大盛況の講座になっております。

3) 他大学との交流として、全国各地で各々の大学の東洋医学研究会が合同でセミナーなどのイベントを行っております。2010年度の日本東洋医学会でも、学生によるワークショップ「学生、若手医療人のための東洋医学—研究会活動の全国展開について考えてみよう—」が開催され北海道から九州までの全国の東洋医学研究会が集まって交流をしました。関東地区では年に一回「はるかん」という名前の1泊2日の合宿セミナーが企画されており、東海地区では「東百会（とうひゃくかい）」、九州地区では「九鼎会（くていかい）」という名前で大学を超えたイベントが企画されています。千葉大学東洋医学研究会としては「はるかん」という関東圏のイベントに参加しており、年に1回、1泊2日で学生による学生のためのセ

ミナーを企画しています。毎年80人以上の学生が参加しており、学生同士で勉強し刺激を与え合うことのできる貴重なイベントとなっております。

4) 実際の診療見学、鍼灸師の先生による鍼灸実習として、座学を超えた体験をすることで、勉強した内容を実際に現場で生かすことのできるよう努力しております。

現在の千葉大学の学生たちは、非常に多くの人々に支えられながら（特に千葉大学東洋医学研究会の活動にお力添え頂いている先生方には本当に頭が下がります……）、東洋医学の勉強をさせていただいております。学ばせていただいたことを自分たちの糧にすることは勿論、全国の他大学の学生とも共有し、インターネット上でも学習に有用な情報を公開することで、最終的に、より多くの患者さんが東洋医学の恩恵を受けられるよう努力していきたいと思っております。

### 千葉大学東洋医学研究会の流れ

昭和14年 千葉医科大学 東洋医学研究会 発足  
会長 眼科教室 伊東弥恵治教授  
藤平健先生と長浜善夫先生が発足に奔走  
昭和15年 藤平健先生が卒業 軍医として出征  
東洋医学研究会 自然休会状態  
～太平洋戦争中は伊東教授が東洋医学の古書を蒐集し、現在附属図書館亥鼻分館の古医書コレクションとなっている～  
昭和20年 千葉医科大学 東洋医学研究会 の再建  
東洋医学講義が始まる（のちに自由講座となる）  
昭和22年 東洋医学研究会 「自由講座」開設  
昭和24年 『東洋医学研究所設置趣意書』（教授会承認）を文部省に提出  
昭和25年 自由講座開始時間前に漢方外来が始まる  
昭和44年 公開講座開設・のちに自由講座と1本化  
東洋医学研究会 30周年記念史編纂  
昭和48年 第1回千葉東洋医学シンポジウム開催  
昭和54年 新病院（現附属病院）移転、漢方外来中

止（9月）  
昭和54年 富山医科薬科大学附属病院和漢診療室開設（4月）  
診療開始（10月）寺澤捷年・土佐寛順先生着任  
平成2年 附属病院和漢診療部教授に寺澤捷年先生就任  
平成5年 富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座開講  
平成元年 第一内科（大藤正雄教授）松下嘉一先生  
漢方外来診療開始  
平成2年 東洋医学研究会 50周年記念史編纂  
平成9年 藤平健先生 死去  
平成11年 東洋医学研究会 60周年記念史編纂  
平成16年 柏の葉診療所開設  
平成17年 和漢診療学講座開設（4月）寺澤捷年教授就任  
附属病院で診療開始（10月）  
平成21年 東洋医学研究会 70周年記念会

（なみき たかお）